

2024年10月6日 主日礼拝(第二)

説教題「信じなさい」ヨハネ福音書14章1～14節

主任牧師 加藤 誠

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。」(ヨハネ福音書14章11節)

「教会」はどのような集まりなのでしょう。主イエスは「教会」に何を期待しておられるのでしょうか。今月は「教会」について聖書に聴いていきたいと思えます。

今朝手がかりにしたいのは、主イエスが弟子たちに求めたこと、期待されたことは何だったのかということです。主イエスは神から託された使命と働きを自分一人で担おうとはされませんでした。一緒に担う「友」(ヨハネ15:14)を求められました。主イエスの使命と働きは「神の国の福音」を宣べ伝えること。主イエスの第一声は「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」(マルコ1:15)でした。「神の国」とは「神の愛」のこと。「近づいた」とは「突入している」というニュアンス。神の愛が今や激しく私たちに迫っている。この神の愛を受け取り、この神の愛を生きていこう。「悔い改めて」とは「方向転換して」。この世界において「神の愛にしっかりと心定めて共に生きていこう」と呼びかけられたのです。そして、この「神の国の福音」を一緒に担う「仲間、同志」を主イエスは求められました。

マルコ3章には主イエスが「これと思う人を呼び寄せ、12人を任命した」とあります。「これと思う人」(岩波訳:これぞと思う人)。プロ野球のドラフト会議では各球団が来年の戦力になる「これと思う選手」をスカウトしますが、主イエスはどのような人材を求めたか。不思議なことに、学のあるような人は一人もおらず、むしろ世間から良く思われていない職業の人が含まれていました。主イエスがこれと思い、呼び寄せられた人たちのことを主イエスご自身はこう言われています。「父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました」(マタイ11:25)。主イエスは「この世の知恵や賢さを持ち合わせていない、幼子のような者」を求められた。それは神の愛を受け入れる「小ささ」を求められたということでしょう。自分のことを「大きい、賢い」と思っている人は神の愛を必要としない。そうではなく「自分には神の愛が必要だ」という「小ささ」を持っている人を、主イエスは「これと思い」、弟子として招かれたのです。

大切なことは、主イエスは「友」を求めたのであり「手下や部下」を求めたのではないということです。世の中には自分の後ろに大勢の「手下や部下」を引き連れて歩きたがる人、自分のことを「先生」と呼ばせて良い気分になりたがる人がいます。が、主イエスはそのような「自慢」や「気分の良さ」を一切必要とされませんでした。ただただ「神の国の福音」に心を定めて、その働きを一緒に担う「友」を求められたの

です。「友」とはどういう存在か。印象的な一つの場面はゲッセマネの祈りです。あそこで主イエスは「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここで一緒に目を覚ましていなさい」（マルコ 14：34）と弟子たちに頼んでいます。「一緒に祈ってほしい」。主イエスが求められたのは、神の国の福音のため「心合わせて祈る友」だったのです。

そして今朝ご一緒に開いたヨハネ 14 章の場面です。いよいよ十字架の最期を覚悟して大切なことを語り遺していこうという主イエスに対して、弟子たちは迫りくる危機がまだピンと来ていない。そのため両者の会話は噛み合わず、チグハグなものとなっています。主イエスは自分がこれから行くことになる父の家について語るのですが、弟子のトマスもフィリポも主イエスが何を言っているのか、まったく理解できません。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか」。主イエスが弟子たちと共に行動されたのは約三年間です。寝食を共にして旅をして、弟子たちも主イエスの人となりについては相当分かるようになったことでしょう。しかし主イエスが語られる「神の国」＝「神の愛」については最初から驚かされっぱなしで、最後まで理解しきれなかったことだろうと思うのです。なにせ主イエスが語られる神の国は、当時のユダヤ教の常識的な教えとはまるっきり違って腰を抜かすようなことばかり。特に「悲惨と屈辱の極みである十字架こそが、神の真実の愛の勝利なのだ」など、どうして理解できるのでしょうか。最後まで分からなかいことばかり。主イエスが復活されて、後になって、はじめてその時に「あの時の意味はこういうことだったのか！」と理解がつながるようなことばかりだったことでしょう。ですからこの場面でも、主イエスは弟子たちに「分かること」を求めています。そうではなく「信じなさい」と語りかけています。主イエスの中に父なる神が働かれています、主イエスが語られる言葉は私たちのための神の語りかけであることを「信じなさい」と。なぜなら「神の愛」は頭で理解しようと思っても、私たち小さな人間には理解しきれないもの。「えっ、そこまで神さまは、そんな人まで神さまは愛されるのですか？」。神の愛はあまりにスケールが大きくて深い愛で、私たちには理解しきれないことだから。でも理解しきれなくてもいい。「神さまの愛を信じなさい」「この愛を受け取って行きなさい」と主イエスは私たちに語られるのです。

わたしが信仰的に深く落ち込んだ時、大谷レニー先生がわたしに向かって「加藤先生、神さまを信じて。教会を信じて」と語られたことが深く心に刻まれています。「教会を信じて」とは「人間の集まりにすぎない教会に、しかし神の愛が確かに働いていることを信じて！」ということでしょう。主イエスが「これと違って」御許に呼び寄せてくださった一人ひとりと共に、神の愛を分かち合い、宣べ伝えていきたいのです。自分の賢さや知恵に頼るのではなく、小さな者たちに注がれて働かれる神の愛を信じるところに、教会は建てられていくのです。